

研究報告

共通科目「現実をみる G」の授業評価に関する考察

——社会的スキルの変化に着目して——

岸田 泰子・八木 範彦

Discussion of Students' Evaluation of Teaching “Perspectives on the Real World G” with a Focus on Changes in their Social Skills

KISHIDA Yasuko and YAGI Norihiko

Abstract : In developing the subject “Perspectives on the Real World G”, which is taught as a part of a liberal arts education program, a teaching plan which revolves around the discussion by students of certain topics was developed and delivered as an attempt to avoid “the one-way lecture” style of instruction. Before and after the class, students' social skills were measured using Kikuchi's Social Skill Scale (Kiss-18). In addition, students were asked about their level of expectation before the class and their satisfaction afterwards. The results of a statistical examination revealed a positive change in two items relating to the communication skills in Kiss, which suggested that the level of satisfaction was significantly higher than the expectation before the class. Furthermore, more than half of the students responded to the introduction of discussion positively in their free response space. This study highlighted once again the importance of teachers analysing the students' evaluation of teaching and utilising the results to make a conscious effort to develop a creative teaching plan in order to improve their teaching.

抄録 : 共通科目「現実をみる G」を展開するにあたり、教員から学生への一方向の授業とならない工夫として、テーマに対して学生間のディスカッションを中心とした授業計画を立案し、実践した。授業の前後で、Kikuchi's Social Skill Scale (Kiss-18) を測定し、また授業前に本授業に対する期待度、授業後に満足度をたずね、統計的検討を加えたところ、Kiss のうち、コミュニケーションスキルに関する 2 項目で良好な変化の傾向が認められ、授業前の期待度より有意に高い満足度が得られた。また半数以上の学生の自由記載の中に、ディスカッションを取り入れたことに対するプラス評価が示された。

授業評価を分析し、その分析結果に即して教員が意識的に授業方法に工夫を凝らし授業改善につなげることが重要であると再認識された。

緒 言

1991 年、当時の文部省によって大学設置基準が大綱化されたあと、全国の大学で大きな教育改革の動きが見られたが、一般教養教育の果たすべき役割や使命

は共通認識となっていない¹⁾。先行研究を概観したところ、ここ数年、この類の調査研究は多く行われておらず、積極的な議論がなされていないこともわかった。

当学における「現実をみる」という科目は当学全学共通科目の中の発見科目にあたり、「現実をみる A」

から「現実をみる G」まで7つの細科目に分かれている(選択必修科目, 各2単位, 2~4年次開講)。担当教員はそれぞれの専門性の中で具体的分野の現実を解説, 講義するという内容である。平成19年度前期に開講された「現実をみる G」では「健康」をメインテーマとして新設学部の看護リハビリテーション学部教員である著者ら2名が担当し, 看護とリハビリテーションとに関する基礎知識や最近のトピックスを取り上げ, 学生たちにこれらを現実的に考えさせる機会をもたせることとなった。これまで著者は職業人を養成する専門教育を主として行い, プロフェッションに要請される職能を身につけさせるという教育活動を行ってきた。職業教育としての専門教育は社会的責任(accountability)への要求に応えやすい。しかし, 本学に赴任して「現実をみる G」という共通科目の担当をすることとなったのである。一般教養科目に相当するこの科目の中で, 一体何を教えるべきか, 何を教えることができるのか。

取り急いで授業開始にあたり, 著者と担当教員で話し合ったことは, 教員から学生への一方的な知識の提供としての科目ではなく, 学生間の討議を中心とした会話をういた授業内容を展開することにより, 学生が主体的に授業に参加して学習することができるようにしたいということであった。座学中心の講義は学生たちの主体性を欠き, そのことは学生たちにとって, 与えられ, 提供された教育となってしまう, 自ら学ぶという学習の醍醐味を失うことにもつながると思われた。また当学の学生は学部学科により特色があり, 同じ学部以外の交流が少ないのではないかと他の教員からの意見を受けて, 学生同士の討議を組み入れることは, 学部を超えた交流を図り, コミュニケーション能力をはじめとする社会的スキルの向上にもつながるのではないかと考えたのである。前期カリキュラムを終えて, 改めてこの共通科目である「現実をみる G」の展開について, 科目独自の評価の必要性を強く感じた。授業開始までの準備期間は十分とは言えず, 一般教養的な科目における教育実践の少ない著者らが試行しつつ展開した荒削りで, なおかつささやかな取り組みではあるが, 授業評価の一環として振り返り, 報告する。

研究目的

本研究の目的は「現実をみる G」の教育的効果を検証し, 授業評価につなげるとともに共通科目のあり

方を考えることである。

研究方法

1) 調査対象者

2007年度前期セメスター 全学共通教養科目「現実をみる G」の受講者2年生26名。

2) 調査実施時期

2007年4月10日の第1回授業開始前と2007年7月17日の第14回授業終了後の計2回, 無記名のアンケート調査を実施した。終了後調査を第14回に実施した理由は, 最終回である第15回には当大学所定の全学共通授業評価が実施されるために学生への負担が大きくなることを回避するためである。

3) 調査内容

- (1) 第1回授業開始前に授業に対する期待度(1~10までの10段階の数字で回答し, 数値の高いほうが期待度が高いことを示す)
- (2) 第14回授業終了後に授業に対する満足度(1~10までの10段階の数字で回答し, 数値の高いほうが期待度が高いことを示す)
- (3) 2回ともに Kikuchi's Social Skill Scale 18項目版(Kiss-18)を実施した。回答は「5. いつもそうだ」, 「4. たいていそうだ」, 「3. どちらともいえない」, 「2. たいていそうでない」, 「1. いつもそうでない」の5段階でこれを得点化した。

本尺度は菊池によって作成された18項目からなる尺度であり, 信頼性・妥当性が検討されている。社会的スキルを身につけている程度を測定する尺度であり²⁾, スクリーニングに非常に適しているといわれている³⁾。なお菊池によれば, 社会的スキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル(技能)」と定義されている²⁾。本研究においてこの尺度を利用した理由は, 授業において他学部の学生間で会話を重ねることによる対人関係上の効果を測定するためである。

- (4) 第14回授業終了後に自由記載による本授業に対する感想・意見をたずねた。

なお数値データの集計および統計的検定には SPSS ver. 13.0 を用いた。有意水準はサンプル数が少ないことにより10%とした。

4) 授業内容

(1) 授業目標

1. リハビリテーションの考え方や障害について考

表1 授業内容

回	授業内容	ホームワーク
第1回	オリエンテーション 授業の進め方などについて説明。 グループの決定（自己紹介、受講の動機）	
第2回	講義「リハビリテーションについて」	リハビリテーションに関する情報収集
第3回	グループディスカッション「講義や収集した情報をもとに、リハビリテーションの意義や自分の関わり方について討議。討議内容について発表、意見交換」	討議内容を決定し、発表準備
第4回	発表 全体ディスカッション「発表と全体討議」	ショートレポート提出
第5回	講義「障害について」	障害や障害をもつ人たちのニーズや支援方法に関する情報収集
第6回	グループディスカッション 発表「講義や収集した情報をもとに、障害受容や障害をもつ人の立場を考え、自分の関わり方について討議。発表内容について意見交換」	討議内容を決定し、発表準備
第7回	発表 全体ディスカッション「発表と全体討議」	前半終了レポート提出
第8回	講義 リプロダクティブ・ヘルス (1)「産む」ということ	産むという選択をする人たちに関する情報収集
第9回	グループディスカッション「講義や収集した情報をもとに、リプロダクティブ・ヘルスの意義や自分自身の考えについて討議」	討議内容を決定し、発表準備
第10回	講義 リプロダクティブ・ヘルス (2)「産まない」ということ	産まないという選択をする人たちに関する情報収集
第11回	グループディスカッション「講義や収集した情報をもとに、リプロダクティブ・ヘルスの意義や自分自身の考えについて討議」	討議内容を決定し、発表準備
第12回	講義 リプロダクティブ・ヘルス (3)「産めない」ということ	産めない人たちの支援に関する情報収集
第13回	グループディスカッション「講義や収集した情報をもとに、リプロダクティブ・ヘルスの意義や自分自身の考えについて討議」	ショートレポート提出 討議内容の決定し、発表準備
第14回	発表 全体ディスカッション「発表と全体討議」	後半終了レポート提出 発表準備
第15回	まとめ 授業アンケート調査（大学規定のもの）	

える（前半1～7回と最終回）

2. リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）について考える（後半8回～14回）

(2) 授業内容

看護リハビリテーション学部の教員2名による2単位15回の授業であり、それぞれの教員は前半後半に分かれてオムニバス形式を取り、前半はリハビリテーション、後半はリプロダクティブ・ヘルスに関する内容を取り扱った。

内容は講義による基礎知識の習得、グループ討議によるもっと知りたい課題の発見、ホームワーク、グループ討議、発表を組み合わせで展開した。具体的内容は表1のとおりである。グループ編成は担当教員が行い、テーマごとに変更を施した。学部・学科がランダ

ムになるようなグループ分けを意識した。

(3) その他

他者とのディスカッションを中心とするため、次のような受講条件を課した。

1. 自分の生き方や家族、社会のことなど、より広く深く考えてみたいという積極的な姿勢を持っていること
2. 主体的にコミュニケーションやグループディスカッションに参加できること
3. 人の意見や問題意識の積極的に耳を傾け、意見や感想を述べられること
4. 相手が傷つくような罵倒や抽象をしないこと。共感的理解と共同で問題を発展、形成する志向性を有すること

本科目はグループディスカッションを取り入れるため、受講者が増えると教員の目が届きにくくなることから受講者の人数を50名までと限定した。

5) 倫理的配慮

調査は無記名であり、結果は教育評価、研究のためだけに使用し、協力しない場合でも不利益はないこと、成績には無関係であることを文書および口頭で説明した上で調査を実施した。

結 果

第1回目の調査では受講者26名全員から有効回答が得られた。第2回目の終了時調査では欠席した2名を除き、出席した24名全員から有効回答が得られた。

1. 授業に対する期待度と満足度の比較

1～10までの10段階の数字で回答を求めた結果(数値の高いほうが期待度が高いことを示す)は、期待度6.71 (S.D.=1.39)、満足度8.14 (S.D.=1.46)でt検定の結果で有意差が認められた ($t=3.34, p<0.01$)。

2. Kikuchi's Social Skill Scale 18 項目版 (Kiss-18) の結果

授業前後の Kiss-18 の集計結果と t 検定の結果を表2に示した。

Kiss-18 のうち項目1「他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。」と項目15「初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。」に若干の有意差 ($p<0.10$) がみられ、授業後にこれらコミュニケーションスキルに関する2項目は良好な方向へ変化していた。

本調査における対象者の Kiss-18 の総得点は授業前55.92 (S.D.=10.70)、授業後60.50 (S.D.=11.33)であり、はずれ値は見られなかった。授業前後の総得点に有意差は認められなかった。なお、菊池による調査では、本尺度の大学生女子の平均値は58.35 (S.D.=9.02)である²⁾。

3. 授業終了後に自由記載による本授業に対する感想・意見

21件の記述が見られ、内容分析により、討議を取り入れたこと(16件)と、取り扱った内容に関すること(5件)の2つに分類された。

討議を取り入れたことについては、「他の学科の人と話したりすることはもちろん、関わることも初めて

表2 Kiss-18の結果

質 問 項 目	授業前		授業後		t 値	p 値
	平均値	S.D.	平均値	S.D.		
1. 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。	3.09	1.06	3.64	0.73	1.98	0.05
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	3.09	1.15	3.32	0.89	0.73	0.47
3. 他人を助けることを、上手にやれますか。	3.32	0.89	3.55	0.8	0.89	0.38
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.23	0.87	3.41	0.73	0.75	0.46
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	3.14	1.32	3.64	1.05	1.39	0.17
6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	3.05	0.72	3.18	0.85	1.39	0.57
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	2.77	0.92	3.18	0.91	1.48	0.15
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	2.68	0.84	3.05	1	1.48	0.2
9. 仕事(学習)をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。	2.86	0.77	3.09	1.02	0.83	0.41
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	2.91	1.06	3.23	1.07	0.99	0.33
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	2.77	1.02	3.09	0.87	1.11	0.27
12. 仕事(学習)の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	2.86	1.17	3.18	1.01	0.97	0.34
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	3.23	1.31	3.5	1.01	0.97	0.44
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	3.27	1.08	3.14	0.83	0.47	0.64
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	2.91	1.02	3.41	0.91	1.72	0.09
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	3.59	1.1	3.91	0.87	1.07	0.29
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。	3.5	0.96	3.68	0.99	0.62	0.54
18. 仕事(学習)の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。	3.09	1.06	3.27	1.08	0.56	0.58
合計得点	55.92	10.7	60.5	11.33	1.45	0.15

に近かったので良い経験ができたと思う」、「いろいろな人の意見が聞けてよかった」、「一方的に授業をきくより楽しいし良いと思う」、「ディスカッションでの意見交換で自分の考えを言えるのはすごく良かった」、「グループで話し合ったりすればいろんなことがわかったりするからいいと思う」、「友達が増えた。楽しかった」など、16件すべてにおいてプラスの評価が得られた。

取り扱った内容に関することでは、「自分では絶対に調べることがないことも調べたりできてよかった」、「自分に関することなどで勉強になった」、「生きるためのいろいろな知識が知れたと思う」などの記述があった。

考 察

1. 討議を取り入れたことの教育効果

Kiss-18の授業前後の変化として、コミュニケーションスキルに関する2項目に若干の良好な上昇がみられた。サンプルのパワー不足のため、このことを即、本授業の教育効果と見るのは無謀ではあるが、自由記載の結果をあわせてみると、学部、学科を越えたグループでの討議によって他者に関わり、意見を聴くことで得られるもの感じ、自分の意見を述べることの大切さに気づいた学生もいた。社会的スキルの重要要素は「人の話を聴くこと」、「自己を主張すること」である³⁾から、当初目論んだ社会的スキルの向上に何らかの影響はあるものと考えられる。しかしながら期待していた可視的な数値評価に結びつかなかった原因として、前述のサンプル数の少なさに加え、社会的スキルというものが、わずか3ヶ月、14回での授業によって変化すると考えにくいという測定用具の選択の問題があった。もう少し長いスパンで観測することができれば、あるいは変化が現れたかもしれないが、本授業で体験した討議を目的とした他者との交流が今後の彼女らの社会的スキルアップに結びつくきっかけになることを願いたい。このようなスキルの獲得もまた共通科目としては必要な内容であろう。

2. 授業全般の評価

平成8年度の当学における学生生活実態調査⁴⁾によれば、2年生の共通科目の授業内容に対する満足度は、「非常に満足している」、「どちらかといえば満足している」という肯定的な回答をあわせて約6割弱である。授業内容の理解について「ほとんど理解できて

いる」、「かなり理解できている」をあわせた肯定的評価も同様の6割弱であった。4割強の学生が「満足していない」、「理解できていない」に傾いていたことになる。学生の理解度は満足度に影響する^{5,6)}。参考にした学生生活実態調査は、当学の資料として引用できる最新版ではあるものの、年次の違いもあり、単純に比較することは危険ではあるが、本授業終了時の満足度の平均値が10段階中8.14であったことから、まずまずの満足感は得られたものと考えられる。大学による差異はあるだろうが、学生による授業評価アンケートについて、信頼性が高い⁷⁾という調査結果がある。本授業では、自由記載中のプラス評価や授業前の期待度に比べ高い満足度が得られたことは、学生自身が学習し調べてきた内容を深めることができたことによるものと推察でき、学生にとって有意義な授業内容であったと評価できるのではないだろうか。

3. 授業評価のあり方

学生による授業評価は、近年急速に増加しており、現在8割以上の大学で実施されている⁸⁾。その背景には、大学設置基準の大綱化、大学の自己評価・自己点検、教育面での情報発信といった大学改革の大きな流れがある⁹⁾。当学においても例外ではなく、全学的に取り組みされ、その結果は自己点検・評価の一部として活用されている⁴⁾。しかし学生による授業評価については、調査内容も、結果の利用方法も大学によって大きく異なっており⁵⁾、大学全体でデータを報告例のように分析するには、検討すべき課題が多い⁹⁾。多くの授業の評価結果を比較しようとする分析方法は、大学の授業が教授者の独自性が発揮される大学教育の特性を見失うことにつながる可能性があり、また学生から高い授業評価を受けていることが大学教育にとって“よい授業”と必ずしもいえるわけではない¹⁰⁾。

さらに、授業について学生の意識と教員の意識にはギャップがみられる⁹⁾ことは認識しておく必要がある。そして教育効果は授業科目によって異なるのが当然である。したがって一様に形式的な一斉評価だけではなく、各教員が評価項目を選定することも必要であり、そうして得られた評価は改善と一体となった取り組みが必要となる¹¹⁾。授業評価を詳細に分析し、その結果をフィードバックすることによって、授業改善の効果はあがるはずである。そのことはすなわち、ファカルティ・ディベロプメントにつながるからである。

本調査は、当学が全学的に執り行う調査とは別項目で収集したが、本来はこれらの結果を総合的に解釈し

たほうが情報量が多く、有効であるにちがいない。本報は全学で行った調査結果が出る前の執筆となり、総合的に評価できなかったことは非常に残念であるが、これは今後の課題としたい。

総じて、直接的に授業の質を変えていけるほどに評価結果を読み取ることは容易ではない。第三者評価を交えるなど、多面的な評価方法を工夫することも今後検討すべき課題である。

補足ながら、本授業に関する私見を述べる。学生がグループ討議をしている間、担当教員はグループ間を巡回し、学生との対話時間を持った。専門的知識をまず情報として収集させるための講義の後にグループ討議に入った形であるが、講義時間に私語の多い学生であっても討議中の学習態度は良好であり、会話内容は学習内容に応じたものであった。自由記載にある「一方的に授業をきくより楽しいし良いと思う」とはまさにこのことだと感じた。また意外にも、教員に向けられた直接的な質問も多く、その場で教員が補足説明する場面も多々あり、講義だけの授業科目では得られない体験であったと思われる。

結 語

共通科目「現実をみる G」に討議を取り入れた授業を展開し、学生の社会的スキルに若干の影響を与える可能性への示唆を得た。本研究をまとめるにあたり、この教授方法が功を奏したということではなく、授業評価を分析し、その分析結果に即して教員が意識的に授業方法に工夫を凝らすという授業改善のための努力を惜しまないということが重要であると再認識できた。共通科目として、本授業がどうであったかという結論を得ることは難しい。しかし、一般教養科目に必要なものの1つに学習過程全体を把握する方略を教員自身が持つことがある¹⁾、といわれていることか

ら、その一翼を担うことはできたのではないかと考えている。そうは言っても今後も模索は続くこととなりそうであり、共通科目の教授者として未熟な著者は、この科目を通してまさに大学教育の「現実をみる」こととなったのである。

引用文献

- 1) 梅本 裕：大学における一般教養教育の意味についての研究ノート－会話の作法と一般教養教育－. 京都橘女子大学研究紀要 1997; 24: 241-253
- 2) 今野裕之：Kiss-18. 心理測定尺度集Ⅱ, 堀 洋道 監修, 吉田富二雄編, サイエンス社, 東京, 2001, pp 170-174
- 3) 相川 充：人づきあいの技術 社会的スキルの心理学. サイエンス社, 東京, 2000; pp 163-200
- 4) 甲南女子大学 自己点検・評価報告書 2000; pp 171-193
- 5) 浜野 隆, 牟田博光：大学の授業評価にもとづく教育効果の分析. 広島大学大学教育研究センター・大学論集 1996; 26: 169-187
- 6) 西岡俊哲：2001年度授業評価アンケート分析結果について. 阪南大学教育研究所年報 2002; 5: 35-46
- 7) 出野 務, 今安達也：学生による授業評価の研究(その2)－「授業についてのアンケート」に対する学生の意識の実態－. 武庫川女子大学教育研究所研究レポート 1999; 22: 19-32
- 8) 天野智水, 南部広孝：わが国の国立大学における学生による授業評価の展開. 広島大学大学教育研究センター・大学論集 2004; 35: 229-243
- 9) 出野 務, 今安達也：学生による授業評価の研究(その1)－教員個人におけるデータ処理方法の検討－. 武庫川女子大学教育研究所研究レポート 1997; 18: 1-20
- 10) 出野 務, 佐藤恵次：学生による授業評価の研究(その3)－学生の主体性と授業評価の関連－. 武庫川女子大学教育研究所研究レポート 1999; 23: 45-68
- 11) 高橋和子, 林 義樹, 種田保穂：授業改善に向けた全学の取り組み－授業評価と授業改善計画書の一体化－. 京都大学高等教育研究 2005; 11: 19-32